

かながわ生物多様性計画の実施状況について

「かながわ生物多様性計画」(計画期間H28.4～R2.3)

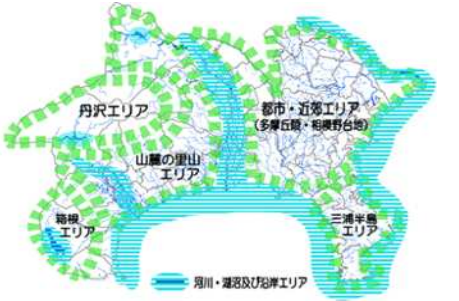
主な取組

取組ごとの成果・課題

【計画の目標・取組の体系】

く 目 標 １

地域の特性に応じた生物多様性の保全



生態系に着目して6つのエリアに区分し、その特性に応じた生物多様性の保全を進めていくことを目標とする。

1 県土のエリアに即した取組

(1)丹沢エリア

(2)箱根エリア

(3)山麓の里山エリア

(4)都市・近郊エリア

(5)三浦半島エリア

(6)河川・湖沼及び海岸エリア

2 エリアをまたぐ取組

(1)野生鳥獣との共存を目指した取組


(2)外来生物の監視と防除

(3)法令・制度等を通じた生態系の保全

(4)生物多様性への負荷を軽減する取組

く 目 標 ２

生物多様性の理解と保全行動の促進



将来にわたり生物多様性の恵みを楽しむよう、県民や事業者、行政など様々な活動主体が生物多様性について理解を深め、日常の活動において、生物多様性に配慮した行動や生物多様性の保全のための行動をとることを促進することを目標とする

3 生物多様性の保全のための行動の促進

(1)生物多様性の保全の基盤となる情報の収集と発信

(2)多様な主体による取組の促進

(3)環境学習・教育の推進

1 県土のエリアに即した取組

(1)丹沢エリア

ブナ林の立ち枯れやニホンジカによる林床植生の衰退、土壌流出などの自然環境の劣化からの再生を目指して、ブナ林等の保全・再生、公益的機能の発揮を目指した森林の整備、ニホンジカの管理、自然公園の適正利用を図るための取組を推進した。

(2)箱根エリア

自然公園の適正利用を図る取組を進めるとともに、公益的機能を発揮するための森林整備やニホンジカ・ニホンザルの管理などの取組を推進した。

(3)山麓の里山エリア

生物多様性の保全を含めた農業の有する多面的機能と、それを支える農林業の営みを維持するため、里地里山の保全等の促進や地域における農地等保全の共同活動への支援、野生鳥獣との棲み分けに向けた対策などを進めた。

(4)都市・近郊エリア

都市公園の整備や適切な管理運営を行うとともに、トラスト制度など多様な主体との連携・協働による緑地の保全、里地里山の保全等の促進、環境保全型農業の推進などの取組を進めた。

(5)三浦半島エリア

トラスト制度など多様な主体との連携・協働による緑地の保全、地域資源を生かした自然とのふれあいや体験学習の場の提供、環境保全型農業の推進、アライグマ等の防除などの取組を進めた。

(6)河川・湖沼及び海岸エリア

生きものに配慮した川づくりや砂浜の回復・保全、持続可能な水産業などを進めた。

2 エリアをまたぐ取組

(1)野生鳥獣との共存を目指した取組

農業被害や生活被害など野生鳥獣との軋轢を軽減していくため、人と鳥獣との棲み分けを図ることや、ニホンザルやニホンジカに対する管理計画に基づく取組を進めた。

(2)外来生物の監視と防除

外来生物の防除のため、外来生物に関する情報収集や取組等についての情報提供、アライグマの計画的捕獲等を実施した。

(3)法令・制度等を通じた生態系の保全

法令による地域指定により、緑地等を保全するとともに、市町からの緑の基本計画の協議を通じて、市町と連携して生態系の保全に努めた。

(4)生物多様性への負荷を軽減する取組

開発などの事業に伴う生物多様性への負荷を軽減するため、事業者等と調整・協議を行い、環境に配慮した計画的な土地利用を進めるとともに、環境保全型農業や持続可能な水産資源の管理・利用を推進した。

3 生物多様性の保全のための行動の促進

(1)生物多様性の保全の基盤となる情報の収集と発信

県民や事業者、行政などの様々な活動主体が生物多様性の保全のための行動をとることを促進するため、県民参加型調査を開始し、ホームページにおいて生物多様性に関する様々な情報を収集・発信をした。

(生物多様性に関する情報サイトの整備、かながわ生きもの調査の開始 等)

(2)多様な主体による取組の促進

県民や事業者、行政など多様な主体が実施する、生物多様性への配慮や保全のための活動を促進するための取組を進めた。

(アドバイザーの派遣の実施、生物多様性普及啓発パンフレットの配布 等)

(3)環境学習・教育の推進

自然が実感できる場を提供するなど、自然環境を利活用した取組等を通じて、生物多様性に関する環境学習・教育を推進した。

(学校や地域における環境学習・教育の推進、小網代の森における自然観察会などの実施 等)

1 県土のエリアに即した取組

(1)丹沢エリア

これまで重点的に事業を実施してきた場所では、植生の回復やシカの減少傾向などの成果がみられ始めているが、一方で依然として丹沢山地全体の植生回復には至っていない。特に、捕獲が困難な高標高山稜部におけるシカの生息密度は依然として高い状態が継続している。ブナ林等の保全・再生については、これまでの調査研究により、ブナの立ち枯れの原因解明とブナ林を再生するための技術開発に進展がみられた。

(2)箱根エリア

ニホンザルの管理に関し、地域個体群の維持や個体数の増加を防止するなどの取組みの成果があった一方、追い上げ先を設定した計画的な群れの追い上げや、群れの出没状況等に応じた個体数調整が行われず、農作物被害や生活被害等の軽減・根絶には至っていない。また、箱根山地では、近年、シカの生息密度が上昇し、シカの採食による林床植生の衰退が懸念される。

(3)山麓の里山エリア

里地里山認定協定活動の面積は、里地里山保全等地域の選定及び新規の活動団体の認定に伴って増加しているが、活動団体は若い世代の担い手が増えず高齢化が進んでいる。また、これまで鳥獣被害対策に取り組んできたが、県内の農作物被害額は増減を繰り返しながら減少傾向にある。

(4)都市・近郊エリア

地域制緑地の面積は、ほぼ横ばいで推移しており、種類別では、特別緑地保全地区と保安林は増加しているが、生産緑地地区は減少している。また、トラスト緑地の面積は、ほぼ横ばいで推移しているが、都市近郊の緑地は、宅地開発が進むとともに、草刈や樹木管理の不足、所有者の相続等によって減少傾向にあるため、県による買入れ等の保全事業が重要になる。一方、都市公園の面積は年々増加している。

(5)三浦半島エリア

小網代の森において、直近3年間の年間利用者は横ばいとなっているが、平成26年に一般利用を開始した時と比較すると減少傾向にある。また、アライグマの防除に関し、被害が大きい横須賀三浦地域では積極的な捕獲が推進され、生息密度が低下している可能性があるが、アライグマが好んで生息する水辺を含む緑地は、生物多様性が高い地域でもあり、保全の必要性が高いため、生息密度に関わらず継続して捕獲を実施する必要がある。

(6)河川・湖沼及び海岸エリア

土で護岸を覆い、植生を施すなど自然環境に配慮した川づくりを3年間で8カ所実施した。また、川や湖に生息する魚類の生息環境の改善や生態系復元の研究を行い、水生生物等の資源・生態の調査として、相模川や酒匂川などで絶滅危惧種の分布調査を実施した。

＜参考＞

【地域の特性に応じた生物多様性の保全】

	H28 年度	→	H29 年度	→	H30 年度	
指標 1	水源の森林エリア内の私有林で適切に管理されている森林の面積の割合	82%	→	87%	→	89%
指標 2	丹沢山地における林床植生の状況 (※)	33%	→	14%	→	7%

※ 複数の調査地点において、現況と5年前の植被率(植物で覆われている地表の割合)を比較し、10%以上の増加が認められる調査地点数の割合を表したものである。全調査地点を5年間に分けてモニタリングしていることから、前年度との比較はできない。

2 エリアをまたぐ取組

○野生鳥獣との共存を目指した取組、外来生物の監視と防除

ニホンジカ、ニホンザル、イノシシによる農作物被害額は年によって増減はあるが、長期的に見ると減少傾向にある。アライグマの捕獲に関し、横須賀・三浦地域、横浜川崎地域等で積極的な捕獲が推進された一方で、それ以外の密度が低い地域、特に侵入が始まった地域では、十分に捕獲が推進されなかった地域もあり、分布拡大が継続している。

＜参考＞

【地域の特性に応じた生物多様性の保全】

	H28 年度	→	H29 年度	→	H30 年度	
指標 3	ニホンジカによる農作物被害額	19,215 千円	→	37,354 千円	→	23,962 千円
〃	ニホンザルによる農作物被害額	12,390 千円	→	6,441 千円	→	10,289 千円
〃	イノシシによる農作物被害額	81,794 千円	→	37,827 千円	→	63,652 千円
指標 4	アライグマの捕獲効率 (※)	0.65	→	0.43	→	0.48

3 生物多様性の保全のための行動の促進

生物多様性計画に基づく各事業を実施し、生物多様性の認知度向上に努めてきたが、認知度は低迷している。生物多様性の概念はわかりづらく、短期間で認知度が上がるものではないため、長期にわたる取組みが必要。さらに、生物多様性をより親しみやすく、環境への関心を深めてもらえるよう、認知度向上の対策が必要である。

＜参考＞

【生物多様性の理解と保全行動の促進】

	H28 年度	→	H29 年度	→	H30 年度	
指標 9	生物多様性についての県民意識	28.3%	→	28.0%	→	22.2%
指標 1 0	里地里山の保全活動に取り組んだ人数	4,812 人	→	4,969 人	→	5,089 人
指標 1 1	小網代の森の年間利用者数	45,000 人	→	40,000 人	→	45,000 人
指標 1 2	自然環境保全センターが実施する研修会、観察会等の参加人数	2,792 人	→	2,403 人	→	2,462 人